《修士論文要旨》

『太平記』における後醍醐天皇の物語

岸下裕一*

『太平記』は、後醍醐天皇の倒幕、その後の南北朝の騒乱を描いた四十巻からなる軍記物語である。その『太平記』の序は、長谷川端氏の「いわゆる第三部の巻々がまとめられた時点と大きく関連していると考えられる。」という指摘をもとに考察すると、『太平記』がかなり形を整えた後に加えられたものであると考えられる。そしてそのことから、序が表す、世を治めるための条件である「天の徳を備えた天皇と地の道を実践する臣の存在」つまり、「儒教的政道観」というものは、作者の「世界観」・「政道観」または、「作者の世界認識の基本姿勢」をあらわすものであるとともに、『太平記』世界を支配する基本的な思想であると考えた。そして、『太平記』作者（作者群）が南北朝の内乱の様相を物語として、綴り上げていく上で、重要視したものは「君と臣による政道のありかた」というものであり、四半世紀にいたる争乱の原因を後醍醐天皇と北条高時に求め、高時のみが悪なのではなく、後醍醐天皇も悪であるという考えの下、綴られた物語であると考えた。

『太平記』は、序に続き、争乱の原因である後醍醐天皇、北条高時を登場させ、批判の対象にしている。『太平記』世界には、さまざまな人物が登場し、批判され、そして去っていく。『太平記』は、「「誰も勝たない」物語である。『敗者の物語』ではなく、誰も勝つ者のない、後醍醐天皇をはじめ強烈に『意志』した者たちが、次々に去って行く物語。」なのである。その一番初めに後醍醐天皇は批判の対象にされている。

『太平記』は、「後醍醐天皇の物語」である。「後醍醐天皇批判の物語」である。その、「後醍醐天皇批判」の性格をさぐるために、『太平記』世界の中で後醍醐天皇が見る二つの夢、そして、後醍醐天皇の近臣たちの『太平記』世界からの退場を考察してきた。

後醍醐天皇が見た二つの夢、そのひとつは、笠置での楠正成召還のための霊夢であった。紫宸殿の庭前の常葉木が南へよく伸びているさまを夢解きし、「楠」の字を表した後醍醐天皇は、万里小路藤房に正成を迎えさせ、その後正成は鬼神のごとき活躍をして、後醍醐天皇を助ける。そして、後醍醐天皇自身は再びその手に政権を取り戻すであろう。というものであったが、この夢に対して筆者は、夢の舞台がなぜ紫宸殿の中ではなく、庭前であったのか、そして、夢の中に出てきた日光・月光の両菩薩はなぜ涙を流していたのか、という二つの疑問

平成16年度　*文学研究科国文学専攻

を提示し、それについて考察をおこなった。すなわち、「庭前」というのは、建武政権に見られる一時的な政権の奪取、そして、吉野の南朝政権を表し、そのことを告げるため、日光・月光の両菩薩は涙を流しながら後醍醐と接していたのである。

ふたつめの夢は、巻第十三にみられた後醍醐天皇暗殺計画を予言するという内容の夢譚であった。ここでは、後醍醐天皇の幕府討伐前とその後の建武政権樹立後の夢に対する意識の違いというものが見て取れた。笠置では、あんなに夢解きに熱心になり、その結果を重要視していた後醍醐天皇が、この場面では「これ程までに事を定めたる臨幸を、夢などによつて期に臨んで停めん事も如何」と思い、一度は無視する。結局、暗殺計画は未然に発覚し、後醍醐天皇は難を逃れたわけであるが、夢を無視したままであったならば、後醍醐天皇は死んでいたわけである。そこには、政権を樹立し、自信を持つ、驕った後醍醐像が描かれていた。

続く第三章では、後醍醐天皇に尽くした忠臣たちの後醍醐天皇自身の手による『太平記』世界からの退場の顛末を見て、その悲劇的な描きかたから後醍醐天皇に対する『太平記』の批判的性格というものについて考察をおこなった。

『太平記』序に見られる「儒教的政道観」は、『太平記』全体を律する世界観であるが、続く巻第一で描かれるように後醍醐天皇自身には「天の徳」は備わっていない。ゆえに、いかに忠臣達が「地の道」の実践をおこない、後醍醐天皇に忠誠を尽くそうとも世の中は平和に治まらなかったのである。本稿では、中原章房、日野俊基、大塔宮護良、万里小路藤房、そして楠正成の『太平記』世界からの退場の場面を見てきた。

中原章房の『太平記』世界からの退場は、島津家本に描かれるものであるが、後醍醐天皇の倒幕計画を聞かされ、そのことをやめるように諫言したら、殺されてしまった。

日野俊基は、倒幕計画の中心人物、計画者として、鎌倉において斬首の憂き目を見た。　大塔宮護良は、後醍醐天皇方の鎌倉幕府討伐の立て役者として、また、隠岐にいる後醍醐天皇の代理として、宮方勢力をとりまとめ後醍醐天皇のために尽くしたのにもかかわらず、足利尊氏との対立をさけるため、そして阿野廉子の陰謀のために、なにより将軍を置きたくないという後醍醐天皇の権力欲のために『太平記』世界から退場させられたのである。

万里小路藤房の場合は、他の忠臣たちとは少し趣を異にする。笠置以来の忠臣である藤房の度重なる諫言を聞き入れることをせず、強引な政治をおこない、武士の不満をあおる後醍醐天皇に対して愛想を尽かしたというかたちで「臣たる道、我において尽くせり。よしや、今は身を奉じて退くにはしかじ」という言葉を残し、自ら『太平記』世界から退場していく。藤房出家後、藤房を戻そうとやっきになる後醍醐が描かれるが、まさに後の祭りであった。

そして、楠正成は、足利尊氏との合戦において、後醍醐天皇により湊川に出陣させられ、その地で弟正季と刺し違えて、死んでいく。正

成は後醍醐天皇により『太平記』世界に召還され、「正成一人いまだ生きてありと聞こし食し候はば、聖運はつひに開くべしと思し召し候へ」といって『太平記』世界で活躍した武将であった。その正成の献策をむげにし、公家の意見を採用し、後醍醐天皇自身が正成を死地へと追いやる。そしてその後、後醍醐天皇は正成が献策したように比叡山に逃げている。その滑稽な様が後醍醐天皇に対する批判として読みとれる。

これら五人の忠臣たちの最期の後にはいつも後醍醐天皇に対する批判ととれる記事が続けられていた。このことは、『太平記』が後醍醐天皇批判の性格を有しており、物語の全体を通して後醍醐天皇を批判しているということを言い表していると考えられる。

論の展開において、本文の引用が長くなった部分もみられるが、『太平記』自身がどのように彼ら忠臣たちの最期を描いているのか、その本文を見ることにより、よりその悲劇性というものが伝わると考えた。『太平記』自身の言葉が何よりの根拠である。

『太平記』が当時の現代史的なものであった以上、正面から天皇を批判するということは、むずかしい。ゆえに、後醍醐天皇に仕えた忠臣たちの後醍醐天皇自身の手による『太平記』世界からの退場を描くことにより、そしてその退場の悲劇性を強調することにより、『太平記』は後醍醐天皇を批判しているのではないだろうか。

『太平記』は「後醍醐天皇の物語」である。「後醍醐天皇批判」の精神を物語全体を通してその根底に有する物語である。